

2019 年・東アジア日本研究者協議会 第 4 回大会（台湾大学）の参加記

（１）「日中関係史と中国人留学生の活動」パネルについて

孫 安 石（神奈川大学）

2019 年 11 月 1 日から 3 日の予定で、台湾・台湾大学を会場に東アジア日本研究者協議会第 4 回大会が開催された。この大会に科研・教育交流（基盤 B・一般，課題番号 17H02686）を中心とした研究メンバーと若手の博士課程の研究者が参加し、「日中関係史と中国人留学生の活動——移動，組織，活動」というパネルを組織することができた。パネルの構成は次の通りであった。

「日中関係史と中国人留学生の活動——移動，組織，活動」

◎日時：2019 年 11 月 2 日

◎場所：台湾・台湾大学

◎内容：司会 見城 悌治（千葉大学）

- 1 「清国留学生会館研究初探」（孫安石，神奈川大学）
- 2 「清国留学生の初期活動——勵志会・訳書彙編社を中心に」（郭夢堃，神奈川大学博士課程）
- 3 「福建省の中国人留日学生について」（劉柯，神奈川大学博士課程）
- 4 「清末留学生の日常生活——日記を素材に」（樂殿武，武蔵野大学）

討論



【図 1】 台湾大学の会場にて



【図 2】 大会の冊子

会場の質疑応答では、

- (1) 清末の官費留学生を選抜する過程で選抜試験が行われた形跡があるか，どうか，
- (2) 勵志会と訳書彙編社で活躍した富士英は，1911 年の辛亥革命以降，中華民国の朝鮮総領事で活躍した人物であることから，その詳細な研究を進めてほしい，という要望が出され，



【図】 清国留学生会館の跡地



【図】 日華学会の旧建物
(現在は東方学会が利用)



【図】 正則英語学院の看板
(現在は正則学園高等学校)

(3) 福建省だけではなく、広東省、広西省などの華南地区からの中国人留学生研究が足りないのではないか、

(4) 中国人留学生の日常生活を取り扱う研究視点の新たな開拓が必要であることなどを巡って活発な意見交換が行われた。

この研究会の参加から帰国した後、大会報告者のメンバーらと共に11月9日、神田神保町の中国人留学生の関連施設を散策する機会があった。

中国人学生が英語学習のために在籍した「正則英語学院」、清末留学生が度々集会を開いた「錦輝館」、周恩来が学んだ「東亜高等予備学校」、そして「清国留学生会館」や「日華学会」などの跡地を歩きながら「百聞は一見に如かず」ということわざの重みを感じることができた。

(2) 日中関係史研究と宣教師研究、 そして華僑研究との関係について

郭 夢 垚 (神奈川大学大学院博士後期課程)

筆者は、日中関係史の研究の重要な一分野をなす中国人留学生史の研究、その中でも特に清末時期の中国人留日学生の組織と活動に関する研究を行っているが、この分野の研究は実は、キリスト教の宣教師と華僑などとも幅広い関連があることはあまり知られていない。

19世紀の東アジアでは、キリスト教宣教師が西洋の教科書や学術雑誌を翻訳したり、創刊したり、または新式の学校を設立するなど大きな役割を果たしたことは周知の通りであるが、多くの中国人留学生は、正にキリスト教関連の学校に籍を置きながら近代の新しい知識を学んだ経験があった。また、日本とアジアは勿論、世界各地に点在していた華僑が中国の近代化に大きく貢献したことは周知の通りであるが、特に、日本の華僑は康有為、梁啓超などの立憲派と孫文の革命派を支援する資金源の役割を果たしたことが、近代中国の変容を支えたことは無視できない。

以上の観点からみれば、今回の台湾会議でなされた明治期キリシタン版画を分析した白石恵理の発表と朝鮮華僑の移動と生活の実態を論じた李正熙の報告は、中国人留学生史研究に対しても示唆するところが多い。以下、簡単に内容を紹介し、今後の研究の参考にしたい。

(一) 白石恵理 (日本・国際日本文化研究センター)

「明治期キリシタン版画にみる中国と日本の文化表象」

白石氏の発表は、明治期の長崎を中心に宣教活動を展開したド・ロ神父により制作されたキリシタン木版画を研究対象とし、ド・ロ版画のルーツをたどり、その図像の解説を通して、ド・ロ版画の中に潜んでいる日本文化とその影響がド・ロ版画にどのように影響を与えたのか、その版画の特色について紹介するものであった。

白石氏は報告の中で、ド・ロ版画が日本と関係があることは言うまでもないが、中国の上海の徐家匯にあった土山湾の孤児院において制作されたとするイエズス会士のA・ヴァスールの木版画とも関連性があることを明らかにした。さらに「煉獄の靈魂の救い」、「悪人の最期」、「地獄」、「善人の最期」、「復活と公審判」という5点の図像を解釈し、ド・ロ版画は、

- ① キリスト教と仏教・神道、民間信仰のイメージが混淆している、
- ② イエス・キリストと十字架が強調されている、
- ③ 潜伏・隠れキリシタン信仰書の引用が見られる、
- ④ 女性像が大幅に強調されている、
- ⑤ 可愛らしく、親しみやすいモチーフが盛り込まれている、
- ⑥ 明治期の長崎の風俗が活写されている、
- ⑦ 写実的な西洋画の技法の積極的受容がうかがえるという7つの特色を持っていると指摘された。

19世紀を前後した時期、数多くのキリスト教の宣教師は東アジア各国に赴き、当地の風俗に即した宣教活動を展開するために各種の小冊子、版画、雑誌などを活用していた。例えば、ドイツの宣教師カール・ギュツラフは、広州で中国語の月刊誌である『東西洋考毎月続記伝』を創刊したほか、聖書を日本語に訳する活動に参加している。郭南燕編著『ド・ロ版画の旅 ヨーロッパから上海～長崎への多文化的融合』（創樹社美術出版、2019年3月）においても、ド・ロ版画が宣教のための視覚的ツールとして活用され、その版画には東西の融和の試みがなされていることが指摘されている。

筆者は今年の10月26日から29日の間、神奈川大学歴史民俗研究科佐野賢治先生がリードした熊本・天草の現地調査に参加する機会があった。そして、天草の宗教儀式の祭壇で、神道・仏教・キリスト教の3つの宗教がともに並ぶことを目にし、キリスト教と日本文化の融和を実際、この目で味わうことができた。さらに、今回の白石氏の報告を通して、歴史研究において「文字資料」の不足を補う重要な研究資料として、「非文字資料」を活動できるのではないか、という指摘に筆者も大きな共感を覚えた。

(二) 李正熙 (韓国・仁川大学)

「戦時期の朝鮮華僑の移動と生活の実態——仁川華僑を中心として」

本発表では、1937年の盧溝橋事件爆発直後、朝鮮の仁川に居住する華僑を取り上げ、仁川華商商会資料と朝鮮総督府、そして中国第二歴史档案館の公文書などの一次資料を分析し、仁川華僑の社会・教育・経済方面の変化を考察した上で、「親日」と「抗日」の狭間を生きる朝鮮華僑の社会と生活の実態について紹介された。

日中戦争が勃発した後、朝鮮に滞在する中国人華僑は、集団で帰国することになり、その総数は1937年10月末には約半分に減少し、3万4千645名を数えることになった。同時期に朝鮮総督府は、中国人の朝鮮への入国を禁止する指令を出し、また、朝鮮国内から中国本土への送金を制限するなどの政策を取り、華僑の貿易活動は大きく制限された。そして、1937年12月に北京で湯爾和を首班とする中華民国臨時政府（日本の傀儡政権）が成立されると、日本はこの臨時政府を支持した朝鮮華僑を一転して「友好国の国民」として待遇することになり、仁川華僑は朝鮮のその他の地域と同じく、この傀儡政権に対して支持する態度を表明した。それ以後、朝鮮総督府は中国人の入国制限を緩和し、華僑の人

口は再び増加し、華僑の経済活動は再開することになったという。

李氏の報告の中で、とくに、驚いたのは、仁川華僑に対する教育分野における変化の激しさであった。中国大陆において日本の傀儡政権であった中華民国臨時政府が樹立してからは、華僑学校の校長と教員は、一斉に「親日的」であり、「反」国民党的な人物に変えられ、学校で使う教科書も大きく代わり、華僑教育の主旨は「反共・和平・建国」に一変した、という。

その一方、仁川は抗日運動が最も活発に行われた地域であった、と指摘された。仁川華僑は「日東会」（華僑 21 名が参加）と呼ばれる抗日団体を組織し、この組織は 1940 年から 1943 年にかけて抗日活動に関連する放火 12 件、日本軍に関連する諜報を朝鮮側の独立する組織に提供する活動などを展開したという。日中戦争の開始の直後、中華民国臨時政府及び総領事館の働きかけによって、一時期、朝鮮の華僑は親日を表明したが、共産党八路軍と国民党の影響下、再び、民族主義に覚醒し、最終的に日本の華僑よりも激しい抗日運動を展開していた。

以上、李氏の報告を簡単に紹介したが、王恩美『東アジア現代史のなかの韓国華僑——冷戦体制と「祖国」意識』三元社、2008 年 5 月）の紹介によれば、朝鮮華僑史に関連する研究は、東南アジア、アメリカ、日本などの華僑研究と比べると、先行研究が著しく不足している。このような研究状況の遅れを打開すべく長年において、朝鮮華僑について研究を継続したのが、報告者の李正熙氏である。李氏は、すでにその研究成果の一部を、李正熙『朝鮮華僑と近代東アジア』（京都大学学術出版会、2012 年 5 月）として刊行しており、最近では韓国語の『韓半島華僑史』（韓国、図書出版 東亜細亜、2018 年 10 月）を出版したという。

ところが、この李氏の報告の中で筆者にとって興味深かったことは、中華民国北京政府時期、つまり 1913 年から 1919 年までの長い間に朝鮮総領事を務めた富士英という人物が、実は、清末の時期に日本に留学しており、実際、筆者が書いた論文の中でもたびたび登場している名前であった、ということであった。

富士英は、早稲田大学の政治科で学んでおり、清末の留日学生界においても勵志会の活動、訳書彙編社の翻訳事業、清国留学生会館などにおいても関与している重要な人物である（郭夢垚「清末中国人日本留学生の初期活動について——勵志会と訳書彙編社を中心に」、孫安石・大里浩秋編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』東方書店、2019 年 3 月を参照）。この富士英は、日本での留学を終え、1913 年から約 6 年間に渡り、朝鮮総領事を務めながら、当時朝鮮に設置されていた中国の租界を撤廃する会議が開催された時に中国側の代表として参加している人物で、彼の活動は正に、中国、日本、そして朝鮮にまたがっていると言える。今後、朝鮮の総領事時代の富士英がどのような役割を展開したのか、彼の留学時代の経験が日本政府との交渉中、どのように活用されるのか、などについてさらなる研究が必要であると考えている。

（３）「東アジアにおける日本の位置の変容」

次世代個人発表について

劉

柯（神奈川大学博士課程）

2019 年 11 月 1 日から 3 日にかけて、台北で開催された東アジア日本研究者協議会第 4 回大会に参加し、今回私は「清末の福建省留日学生に関する研究—『清国留学生会館報告』と『官報』を中心に」というテーマの報告を行った。今回の台湾会議の参加は、私にとっては海外の学会に参加する初めて機会であり、東アジア各国（主に日本、中国、韓国など）の日本研究の最前線を直接触れることができた。自分

の知識の及ばない所も多く、今後より積極的に知見を広めていく必要性を感じた。また、東アジア各国の同世代の研究者らの報告を聞くことができたのも、大きな刺激となった。そこで、以下、私が参加したパネルの「東アジアにおける日本の位置の変容」(次世代個人発表パネル)を取り上げ、2つの報告を紹介することにした。

(1) 韓前偉 (中国 清華大学 博士課程)

「不安と評判：清末洋務派における日本近代化への二つの理解の傾向」

19世紀中葉以来、日・中両国はそれぞれが独自の近代化のプロセスを進めたが、日清戦争における清国の敗北は、日本と中国の両国にとって、歴史的な転換点となった。韓氏は、清末の洋務派の日本認識、そして近代化に対する認識を二つにまとめて紹介した。一つは、洋務派官僚は、日本が西洋の機器に注目し自国の近代化を推進していること、を明確に認識し、日本の事例から学び、清国の近代化を推進することを目指していた。二つ目は、日本では西洋化の変革が進むに連れ、従来の伝統的な漢学を軽視し、西洋の学問を重視する傾向が現れたが、多くの洋務派官僚はその傾向に対しては批判的な態度をとっていた。しかし、このような指摘は、1961年に刊行された中国近代史資料叢刊の『洋務運動』(全8冊、中国科学院近代史研究所史料編輯室、中央档案馆明清檔案部編輯組 編、上海人民出版社出版)以来の研究成果においても繰り返し指摘されたもので、どの部分が新しい指摘であるのか、分かり難かったように思う。

(2) 呉舒平 (日本 京都大学 博士課程)

「自由主義的アジア主義：犬養毅と孫文の日中提携論と辛亥革命」

呉氏の報告は、アジア主義という思想に対する検討を通じて、アジア主義が日中関係に及ぼした影響を考察しようとするものであった。犬養毅と孫文は、それぞれ自国の利益を守る立場から、アジア主義と日・中提携論を提唱した。犬養毅は、アジア各国の革命者を庇護する自由主義的なアジア主義者であり、彼は欧米列強が中国の内政に干渉しないことが日本の国益となると考え、日本が中国の改革に協力すべきであると主張した。一方、孫文は1924年に神戸で行った「大アジア主義講演」において、アジア諸国はお互いが覇道の政治を目指すのではなく、平和的に共存すべきであると強調した。

つまり、犬養毅の「アジア主義」は日本が他のアジア諸国を開化されるべきだと主張し、孫文の「アジア主義」は中国が日本の指導を仰ぐべきだと主張した。それを論証するために、呉氏は辛亥革命が勃発してから、革命派が積極的に日本からの援助を受け入れたことを紹介した。

本報告では多くの資料を使って、二つの「アジア主義」を比較して、各自の立場と内容を明らかにしたが、その「アジア主義」が辛亥革命にどのような影響を与えたのか、その具体的な点は指摘されておらず、やや残念に思われた。

研究会の最後の日に、私は台北市の市林区に位置した台湾の「国立故宫博物院」を参観した。週末なので館内は混雑し、韓国人と日本人の観光客が多いと感じた。

北京の故宫博物館と比較すると、台北の故宫博物院の収蔵品は数量的に下回っている。しかし、名品も非常に多い、兩岸の故宫博物院はそれぞれに特色があると思われる。北京の故宫博物館には「清明上河図」、「酈壺方樽」、「平復帖」などの「鎮館の宝」があるように、台北の故宫博物院の収蔵品にも「翠玉白菜」、「毛公鼎」、「江行初雪図」、「黃州寒食帖」などの貴重な歴史的な遺産がある。

ここ数年、台北故宫博物院はすでに外国人観光客にとって欠かせない観光地となり、参観者は帰ってから口々に絶賛している。そして、台北宮博物院のサービスも確かに素晴らしい。例えば、青銅器展では、動画と解説を加え、祖先たちがいかに青銅器を制作したかを説明している。一方、北京故宮は広く、展示の場所も限定されることから、観光客はドアの外から遠目に展示品を見るしかない場合もある。今回は台北故宫博物院の参観を通じて、中華文化の悠久と多彩を実感し、自分の見聞も広めることができた。